

D1-043

在宅酸素療法患者の災害に対する認識

札幌市立大学看護学部

○工藤京子, 中村恵子

【目的】在宅酸素療法 (HOT) を行っている人の災害時避難システムを考える一助にするために, HOT 患者の災害に対する認識の現状を明らかにする。

【方法】呼吸器疾患患者会の会員 95 名に無記名自記式質問紙を用いて, 災害発生に対する意識, 備え, 避難場所や防災訓練などの知識等を調査した。倫理的配慮: 研究者が所属する倫理審査会の審査を受けた。データ収集期間: 平成 26 年 2 月~3 月。

【結果】回収率 55% (52 名)。HOT 患者は半数の 26 名 (男 15, 女 11), 平均年齢は 76 歳だった。停電時の指導を受けたのは 15 名, 受けていない・わからないのは 11 名であった。避難場所は 7 割が知っており, 災害の意識は 77% がかなり・ややしていると答えていたが, 備えについては 46% が何も行なっていなかった。災害時の相談を家族としている人は 39%, 医師としている人は 1 人 (4%) であった。災害時の行動として避難所に行くという人は 31%, 助けを待つ・避難しないが 62% であった。自由記載では, マンションの階段を使えない, 避難所までは歩けない, 覚悟しているなど切実な不安が明らかとなった。

【結論】HOT 患者は災害に対する不安があるものの家族や周囲への相談はあまり行なわず, 諦めや覚悟をしている傾向があることがうかがわれた。今後, 本人だけでなく家族を含めた介入の必要性が示唆された。